

ローマ皇帝ティベリウスの日本における記憶 —江戸時代から明治時代まで—

岡島 雪乃

本稿は、第2代ローマ皇帝ティベリウスの人物像が、(1)日本にいつ伝えられたのか、(2)その人物像が日本においてどのように変遷していったのか、社会的背景に鑑みつつ最初期から明治時代まで調査し、明らかにする。あわせて、その人物像の変遷の要因を明確にする。

ローマ帝国第2代皇帝ティベリウス(Tiberius I(J)ulius Caesar Augustus)(42B.C. - A.D. 37年、在位A.D. 14-37年)は、アウグストゥス帝の時代に将軍として活躍し、その後皇帝となった人物である。将軍時代は、ゲルマニアやパルティアなどに遠征し、異民族を平定した。紀元後14年にアウグストゥスが亡くなるとその地位を継承し、統治前半では、質素儉約に努めたり、泥沼化したゲルマニア戦線から手を引いたり、アジアの地震に対して金銭的援助を行ったりするなど、善政をしいた。統治後半では、カプリ島に隠棲しながら統治を行ったが、腹心である近衛長官セヤヌスの裏切りを受け、彼を断罪すると、恐怖政治を敷くようになった。なお晩年には金融危機が発生し、その鎮静化に努めている。

ティベリウスは、晩年の恐怖政治や、隠遁生活における放蕩の噂、また噂を否定しない彼自身の性格ゆえに、死後、暴君として、長年書物で描かれてきた。一方で、名君としてのティベリウス像が、18世紀から19世紀に、歴史家のヴォルテールやモムゼンらによって再評価され、以降、一般に善と悪を併せ持つ人物として捉えられるようになった。現代日本においては、時折、書籍や新聞記事、漫画、映像作品に登場している。このような現状から、ティベリウスは現代の日本においても何らかの社会的影響力を持っていると考えられる。

以上より筆者は、本研究を行うことで、ティベリウスに与えられた役割を明らかにすることができると考えた。これにより、歴史上の人物に対して日本社会が抱くイメージの一環の解明につながると推測する。

本研究では、ティベリウスが登場する日本語の資料を収集し、その描かれ方や、背景にある社会的状況を考察した。分析の際は、収集した資料を記述内容ごとに分類し、ティベリウスの描かれ方の変遷を中心に、複数の視点を設定してから考察を行った。その結果、(1)については、室町時代に初めて、『新約聖書』の翻訳版によって日本に伝えられたことが分かった。その後、ティベリウスについて書かれた資料は、江戸時代末より増加していったことが調査より判明した。また(2)については、江戸時代末より悪帝としてのティベリウスが登場し、明治時代より善と悪の両面を持つティベリウス像が登場したことが分かった。これらの記述には、翻訳元の資料におけるティベリウスの扱われ方が影響しており、時代が下るにつれて善の記述が現れた一方、「細目」や「要目」により記述内容に縛りが出た。加えて、近代歴史学の普及により、多様な表現、性格描写、治世の善悪判定を行う記述が減少し、世界史におけるティベリウスの重要性は低くなっていったことが明らかになった。

(指導教員 村田 光司)